

演題4. 小唾液腺腫瘍の臨床病理学的検討

○松尾 伸一, 星 秀樹, 杉山 芳樹,
柴崎 信, 笹森 傑, 磯崎 健史

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

(緒言) 唾液腺腫瘍は臨床的に多様性があり良性のものから悪性度の高いものまで幅広いため診断, 治療に苦慮することも少なくない。今回われわれは小唾液腺腫瘍について臨床病理学的に検討を行ったので報告した。(対象) 1975年4月から2005年3月までの30年間に当科で治療を行った60例とした。(結果) 性別では良性, 悪性腫瘍ともに女性の発生頻度が高く, 発症年齢は良性腫瘍が最低16歳, 最高81歳で平均が52.4歳であった。悪性腫瘍は最低28歳, 最高78歳で平均54.2歳であった。来院までの期間は良性腫瘍が最短1ヶ月, 最長20年であり平均3年10ヶ月であった。悪性腫瘍では最短1ヶ月, 最長10年であり平均が1年8ヶ月であった。主訴は, 良性, 悪性腫瘍ともに腫脹が多く, 悪性腫瘍では疼痛などの他症状も認めた。病理学的分類は, 良性腫瘍が36例, 悪性腫瘍が24例で, 良性腫瘍では35例が多形成腺腫であった。悪性腫瘍では粘表皮癌が12例, 腺様のう胞癌が5例で良性, 悪性腫瘍ともに口蓋への発生を多く認めた。悪性腫瘍におけるStage別分類はStage 1が6例, Stage 2が8例, Stage 3が8例, Stage 4が1例であった。治療法は悪性腫瘍では外科療法単独が12例, 外科療法に併用療法を行ったものが11例, 化学療法単独が1例であった。良性腫瘍に対しては, 全例に切除術を施行し, 再発は認めていない。術前に併用療法を行った10例について大星, 下里の分類により病理学的治療効果を評価すると効果のあったものは2例(20%)であった。 Kaplan-Meier法による小唾液腺腫瘍の10年生存率は59.1%で, 組織型別では, 粘表皮癌が62.5%, 腺様のう胞癌が40.0%であった。治療法別では, 外科療法単独が70.1%, 外科療法に併用療法を行ったものが54.5%であった。

演題5. *Streptococcus downei* の antigen I / II 相同遺伝子 *pah* の同定

○田村 晴希, 山田ありさ, 加藤 裕久

岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座

目的: Antigen I / II (Ag I / II) は *S. mutans* の菌体表層タンパク質抗原で, 唾液との付着に関与することが知られている。*S. downei* はサルの口腔内から分離された菌種で, *S. sobrinus* との近縁性が指摘されている。口腔レンサ球菌には Ag I / II 相同遺伝子が分布しているといわれているが, *S. downei* では明らかにされていない。本研究では Ag I / II 相同遺伝子 (*pah*) の同定を目的とした。

材料・方法: *S. downei* MFe28株(標準株)のDNAを鋳型とし, degenerate PCR法を用いて *pah* のA領域を増幅した。この領域を開始点として gene-walking法を行い, *pah* の全長を決定した。次に系統樹を作成し, Ag I / IIファミリーとの相同性を検討した。また, ウェスタンブロット法を用いて PAhの発現を調べた。次に *pah* 欠損株を作製し, 唾液凝集能について検討した。

結果: 4.9-kbの領域の塩基配列を決定した結果, *pah* 遺伝子は1565アミノ酸残基のタンパク質をコードすると予想された(DDBJ: AB207813)。PAhは *S. sobrinus* PAgと高い相同性(97.6%)を示し, 系統樹の解析からも *S. sobrinus* のグループと類似していた。*S. mutans* PAc 特異抗体を用いたウェスタンブロット法の結果, 細胞壁分画にわずかながらもバンドが検出された。唾液凝集能の測定の結果, *pah* 欠損株では, より唾液凝集能の低下がみられた。

考察: アミノ酸配列から PAhは PAgと高い相同性を示した。*pah* 欠損株でみられた唾液凝集能の低下から, PAhは唾液との相互作用に関わっていることが示唆された。

結論: *S. downei* から *pah* を同定した。また *pah* は *S. sobrinus pag* とアミノ酸レベルでの相同性が高いことがわかった。